

*マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(ヨハネ11:21) 彼女はイエスが多くの病人を癒して来られたことを知っているし、お互いに愛しあっていることも確かであるのになぜ、という思いであつただろう。しかし、イエスのことを信じ、信頼しているがゆえの思いでもあつた。

*イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」(11:23~24) イエスはこの後ラザロをよみがえらせることを言っておられるのだが、マルタは、終わりの日のよみがえりのことだと考えた。当時のユダヤ教の2大教派はサドカイ派とパリサイ派。サドカイ派は主として祭司たちが属していた派で、モーセ5書を重んじていたので、復活はないと信じていた。一方パリサイ派は旧約聖書全体を重んじていたので、神に忠実に従っていれば終わりの日よみがえることができると信じていた。

*イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」(11:25~26) よみがえりのいのちは、先の終わりの時のことではなく、今のことである。目の前のわたしが「よみがえり」そのものであり、死で終わることのないいのちなのだ、とイエスと言われる。それゆえ、イエスを信じてつながっていれば、肉体は滅びても霊魂は神とともにあり、永遠に生きるのである。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」(11:27) とマルタは答えた。そして、このあと、死んだはずのラザロが生き返り、イエスご自身も十字架の死から3日目によみがえるという大いなるわざがなされたときにはその信仰は100パーセントになつただろうと思われる。

*パウロは、クリスチャンたちを迫害していたのが、方向を180度変えて福音を命がけで伝える者となつた。それは、キリストの教えを知つたからではなく、復活されたイエスに出会つたからであつた。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きていけるのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20) 同じように復活のイエスに出会つた私たちは、死んでも生きる。復活のイエスの恵みの中に日々生きていけることを感謝したい。